客演指揮　山岡重信

1931年生まれ。早稲田大学理工学部卒。ヴィオラをW・カルボーニ、作曲を小船幸次郎、指揮を岩城宏之、斎藤秀雄の各氏に学ぶ。ヴィオラ奏者として読売日響などに在籍の後、1964年から藤原歌劇団副指揮者として、指揮活動を開始した。同年、民音指揮者コンクールに入賞、読売日響の指揮者に就任し、ベートーヴェンの第9交響曲でデビューした。68年日本音楽舞踊批評家賞を受賞。72年より76年まで都響指揮者として活躍。76年9月より1年間文化庁派遣海外研修員としてドイツ、オーストリアに滞在。

新響の指揮にあたるのは75年のブルックナーの4番、80年の「春の祭典」、ブラームスの1番に続き3度目である。

チェロ独奏　安田謙一郎

1944年生まれ。1955年斉藤秀雄氏に師事し、1959年桐朋学園高等学校音楽科入学。1960年第29回ＮＨＫ毎日音楽コンクールチェロ部門第2位入賞。1966年第34回ＮＨＫ毎日音楽コンクール第1位大賞受賞。海外派遣コンクールにて特別表彰を受ける。

1966年第3回チャイコフスキーコンクール第3位入賞。

ガスパール・カサドに師事。1968年よりフィレンツェ及びケルンにてピエール・フルニエに師事、同時にピアニストの井上直幸らとともにジュネーブ・トリオを結成する。

1969年ルツェルン・フェスティバル合奏団のソリストとなり、同合奏団のヨーロッパ日本、アメリカ、カナダの海外演奏旅行に同行する。1969年より1973年までフルニエのアシスタントとして、チューリッヒの夏期講習会に同行した。1974年には、サンフランシスコにて小沢征爾＝サンフランシスコ交響楽団と協演するなど世界各地で高い評価を受ける。

現在は日本を中心に、その演奏とレコードにより高い評価を得ると共に、1975年より桐朋学園の専任助教授として後進の指導にも力を注いでいる。

演奏　新交響楽団

新交響楽団は1956年3月創立、主婦、学生及び様々な職業を持つ社会人から構成されている。創立以来、音楽監督芥川也寸志の献身的な指導のもとに、ソビエト演奏旅行の他、九州・沖縄等の国内演奏旅行、ベートーベンチクルス、ストラビンスキー3部作一挙上演等を行った。

1976年には創立20周年記念として「日本の交響作品展」と名付けた2夜にわたる演奏会により、「芥川也寸志と新交響楽団」は第8回サントリー音楽賞を受賞。

芥川也寸志

チェロとオーケストラのためのコンチェルト　オスティナート

アントン・ブルックナー

交響曲第7番　ホ長調（ハース版）

Ⅰ．アレグロ・モデラート

Ⅱ．アダージオ、 非常に荘厳に、そして非常にゆっくりと
　―モデラート

Ⅲ．スケルツォ、非常に速く

Ⅳ．フィナーレ、動きをもって、だが速くなく

新交響楽団第92回演奏会

1981年7月29日(水)7時　新響　東京文化会館

YASUSHI AKUTAGAWA

CONCERTO OSTINATO PER V'CELLO ED ORCHESTRA

ANTON BRUCKNER

SYMPHONY NO.7 IN E MAJOR(Haas Version)

Ⅰ．Allegro moderato

Ⅱ．Adagio：Sehr feierlich und sehr langsam-Moderato

Ⅲ．Scherzo：Sehr schnell

Ⅳ．Finale：Bewegt, doch nicht schnell

芥川也寸志

チェロとオーケストラのための コンチェルト・オスティナート

作曲者の言葉

“コンチェルト・オスティナート”は、おそらく、現代にあってはきわめて古典的な風貌をそなえた、チェロのための協奏曲で、譜例1のような進行に固執したオスティナートを中心にして書かれている。
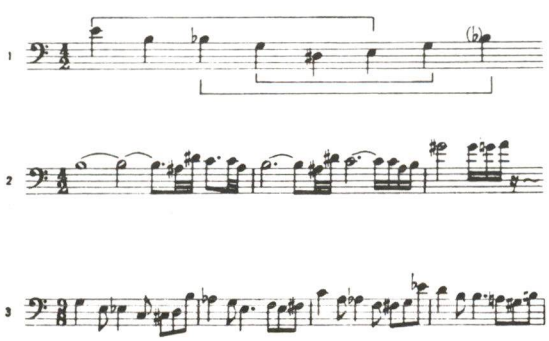
F・メンデルスゾーンは、手紙のなかでこう書いている。〈……きっとあなたは私のことを、いつも不平をブツブツつぶやき続けている、バッソ・オスティナートのようだと思いはじめるに違いありません。そしてついには、うんざりしてしまうでしょうね……。〉(Grove)

オスティナートによる、不朽のシャコンヌや、パッサカリアを書いたJ・S・バッハの、深い理解者であった彼でさえ、オスティナートは〈うんざりする〉ような存在であった。

ロマン派の作曲家たちに見はなされていたオスティナートは、I・ストラヴィンスキーを筆頭とする二十世紀の作曲家たちによって、一応、復活の場を与えられた。しかし、かってJ・S・バッハによって、たとえば〈パッサカリア、ハ短調〉において用いられたように、作曲家の論理を強め、完結させるための名誉あるオスティナートの地位は、いまだに回復されてはいない。現代にあって、私はオスティナートに、単なる修辞学的技法以上の意味を与え得ると思っている。

この曲は、日本の素晴らしき才能、岩崎洸さんの依頼によって作曲された。かって、コンチェルトを書いた作曲家の多くが、魅力的な独奏者に創造力を駆り立てられたのと同じように、私もおそらくそれと似た興奮を味わったことを、今もなお鮮かに記憶している。

このコンチェルトは、1969年12月16日、東京交響楽団定期演奏会で、岩崎洸さんによって初演された。



解　説

曲は、譜例1に示したオスティナーテ・モティーフを中心に、単一楽章で作曲されているが、形式的には、大きな2つの部分から作られている。

第1部は比較的ゆっくりとした部分で、A.B.A′.B′の2部形式でできている。まずAの部分は、ハープシコードとコントラバスのユニゾンによるオスティナーテ・モティーフの提示に始まる。このオスティナーテ・モティーフは、譜例からもわかるように、明確、単純で、下行音型、上行音型による、非常にシンメトリックな音型によっている。前にも述べたように、オスティナートとして使われるモティーフは、このように明確で単純なものの方が、聴くものの意識の根底に焼きつき、効果的なのである。さて、このオスティナーテ・モティーフは、リズムのみを固執しながら、ほかの楽器を加えていく。やがて独奏チェロが、オスティナートの上に、新しい主題a（譜例2）を奏する。この主題aは、発展的な要素を持ち、重要なものである。これをもう一度くり返して、Aの部分を終わる。Bの部分は、テンポが若干速くなり、譜例3の主題bが、弦の伴奏の上に、独奏チェロによって提示される。この歌謡的主題bは、シンメトリックな構造を持っており、あきらかに、オスティナーテ・モティーフから派生されたものである。この主題bにより、ひとつのクライマックスが作られたあと、A′の部分に入り、再びオスティナーテ・モティーフを伴奏に、主題aをくり返す。そしてこの主題aが、いろいろと展開され、変形され最高潮に達し、B′に入る。B′の部分では独奏チェロと打楽器を除いた全オーケストラによって、主題bが再び奏される。やがて、これは第Ⅱ部への推移部分に受け渡される。この推移部分は、主題aを中心に構成されている。まず、独奏チェロとオーケストラのかけ合いがしばらくあった後に、主題aは、トランペット、オーボエ、フルートへと移され、装飾的に奏される。そして、b主題の一部が再現されたあと、ハープシコードと弦楽によるオスティナーテ・モティーフは、テンポが漸次速くなり、アレグロに至って第Ⅱ部になる。

第Ⅱ部は、C．B″．C′の3部形式でできており、独奏チェロが、第Ⅰ部からの余勢をかって、オスティナーテ・モティーフを奏することから始まる。このCの部分は、オスティナーテ・モティーフを、さまざまに変容することに終始する。やがて、ゲネラル・パウゼがあり、中間部B″に入る。B″の部分では、一変してテンポが遅くなり、主題bが独奏チェロによって奏される。しかし。それは主題aにとって変わり、しばらくしたところで独奏チェロのカデンツァになる。カデンツァではオスティナーテ・モティーフ、主題aなどが、技巧的に展開され静寂にむかう。そして、その直後、ハープシコードにより、オスティナーテ・モティーフがユニゾンで奏され、この静寂は打ちこわされ、C′部分が始まる。C′部分は、C部分同様、一貫してオスティナーテ・モティーフの展開、変容に力が注がれる。それは、時には、独奏チェロだけで、時には、独奏チェロとオーケ

ストラとのかけ合いで、時には、全オーケストラでと、巧みに構成されながら高潮していき、終結部に至る。終結部もまた、オスティナーテ・モティーフを中心に、独奏チェロによるグリッサンド、主題a.bの縮小形などを織りなしながら（*sff*）で終わる。

楽器編成

2 Flauti
2 Oboi
2 Clarinetti in Si b
2 Fagotti
2 Corni in Fa
2 Trombe in Do
2 Tromboni (Tenor e basso)

Timpani
Gran Cassa
Tamburo Militare
Peitsche (Slap Stick)
Glockenspiel
Maracas

Arpa
Cembalo

Violini Ⅰ
Violini Ⅱ
Viole
Violoncelli
Contrabassi

演奏時間　約17分

アントン・ブルックナー

交響曲第7番　ホ長調
(ハース版)

ブルックナー（Anton Bruckner 1824～1892）の交響曲には二つの大きな特徴がある。

一つは、終生敬愛してやまなかったワグナーから学んだ壮大なオーケストレーションから鳴る、濃密で壮重な響きである。オルガン的響きとしばしば指摘されるのは周知のところである。たしかに、分厚く、重く、輝きをもった響きは、彼がこよなく愛したオルガンを思わさせる。今夜の第七交響曲も、余すところなくこのオルガン的響きに満ちているわけであるが、その響きは同じ大管弦楽を好んだマーラーやR・シュトラウスの響きとは、はっきり一線を画している。ブルックナーの響きは有体に言えばカトリックの禁欲主義に裏打ちされた響きと言っても差しつかえないだろう。

もう一つの特長は、その曲の長大さと我慢まで折り重ねられる曲想の繰り返し、そしてそれによって築かれる圧倒的なコーダである。

ブルックナーのみが成せる音楽の流れである。濁みなく滔々と流れる音楽、「ブルックナーの時間」とでも言いたくなる、全く個有の時間である。

「ブルックナーの時間」は、その長大さのゆえに、眩いにも似た気分を与え、金管楽器群が築くコラールは、聴く者に熱い高揚感を与える。その高揚感は時にエクスタシー（忘我）そのものに変じていく。

根本的に音楽の喜びの一つが、そのようなエクスタシーの獲得にあることは事実であるが、ブルックナーは極めて禁欲的な音を素材に、人をエクスタシーに誘う、言わば欲情にあふれた音楽を書いた。このアンビヴァレンツ（二律背反）の中に、ブルックナーの誠実なカトリック教徒としての顔と、極めて人間的な顔がオーヴァーラップして見えるように私は思う。

今夜演奏される第7番の交響曲は、1881～83年に書かれたブルックナーの出世作であり、現在でも最もポピュラリティーをもった作品である。特に第2楽章のアダージョがワグナーの死を思って書かれたということで有名であるが、ここでの音楽は抒情的で清浄である。この清浄さは第9番の終楽章に至ってより純化され透明感をもったものになる。それはマーラーの9番の終楽章に見られる清浄さと同じ質のものに思えてならない。

現代において、ブルックナーやマーラーが好まれるのは、その音楽が強くエクスタシーへと導く魅惑的な面を持っているからだと考えてもよいかも知れない。音楽の魔力を強くもった作品なのだろう。現代人にとっては一つの媚薬なのかも知れない。そういう意味ではブルックナーの音楽がもつ一面、つまり言葉を悪くいえば人を欲情させ、忘我へと導く面に強く関心が持たれているのではないか。

ゆえに、ブルックナーの音楽のもつもう一面に、つまり禁欲的な面に耳を傾けることは大切なことであると思う。

（T・O）

楽器編成

2 Flöten
2 Oboen
2 Klarinetten in A
4 Fagotte
4 Horner in F
4 Trompeten in F
3 Posaunen
2 Tenor-Tuben in B
2 Bass-Tuben in F
1 Kontra-Basstuba
3 Pauken
Streicher

演奏時間　約70分

J.V.S.

世界へはばたく

Pygmalius



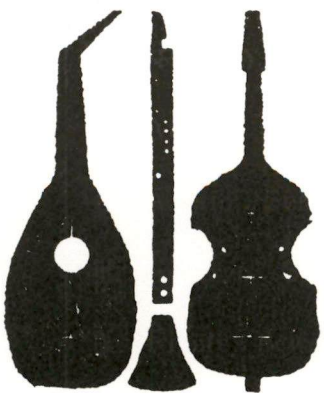
好評発売中

上級者向けソロ用として、
当社の送りだす最高級品ブランドです。
創業以来培われてきた製作技術の全てを
つぎこみ製作したこのブランドは、
他に類のない程に自信を持って皆様に
お勧めできる音質・音量を持っており、
楽界の多くの著名なバイオリニストにより
試奏して頂き、驚嘆にも似た称賛の言葉を
いただいております。
使用される部品の数々に至るまで全て手作りの上、
仕上げも熟練した技術員が一台一台心をこめて
塗り上げたものです。
音質や音量共にその風格のある姿も
是非一度手にとってお確め下さい。
※ピグマリウスには、バイオリンの他
ビオラ、チェロもございます。

Junior Violin Service
文京楽器製造株式会社
〒112 東京都文京区小石川2-1-11
●工房製分数バイオリン・バイオリンケース、西独製分数V弓
その他、特別注文も承っております。お気軽にお問合せください。

確かな楽器は
無限の可能性を秘める

世界の名器*Antonio Stradivari* から初心者用バイオリンまで在庫豊富
ドイツより直輸入バイオリン *SHIMÖRA* ¥40,000～（サイズ¼～¾）



弓毛替は20分で

UC, DC, JCB, 住友カード, 下倉ショッピングローン
お茶の水 *Shimokura's musical instrument*

株式会社 **下倉楽器**

本　店　東京都千代田区神田駿河台2-2　TEL東京（293）7706㈹-9
大宮店　埼玉県 大宮市大門町 2－92　TEL0486(43) 6500～1